

又のとしの春梅の花さかりに、月のおもしろかりける夜、こぞをこひて、かのにしのたいにいきて、月のかたぶくまで、あばらなるいたじきにふせりてよめる。

在原業平朝臣

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身ひとつはもとのみにして

〔伊勢物語下〕むかし二條のきささきの、まだ東宮のみやすん所と申ける時、氏神にまうで給ひけるに、このゑづかさになぶらひける翁、人々のろく給はるついでに、御車より給はりて、よみて奉りける。

大はらやをしほの山もけふこそは神代のこともおもひ出らめとて、心にもかなしと思ひけん、いかゞ思ひけん知すかし、

〔大鏡左大臣時平〕右大臣道眞の御ためによからぬ事いできて、昌泰四年正月廿九日、太宰権帥になしたてまつりてながされ給ふ、略中かのつくしにて、九月九日菊花を御らんじけるついで

に、又京におはしまし、時、九月のこよひ内裏にて菊のえんありしに、このおとゞつくらしめ給へりける詩を、みかど酬醒かしこくかんじたまひて、御衣たまはり給へりしを、つくしまでくだらしめ給へりければ、御らんするにいとゞそのおりおぼしめしいで、つくらせ給ひける。

去年今夜侍清涼 秋思詩篇獨斷腸 恩賜御衣今在此 捧持毎日拜餘香

この詩いとかしこく、人々かんじ申されき、

〔土佐日記〕廿七日、承平四年十二月おほつよりうらとをさしてこぎいづ、かくあるうちに、京にてうまれたりしをんな、こゝにてにはかにうせにしかば、このころのいでたちいそぎをみれど、なにごともしはず、京へかへるにをむなごのなきのみぞかなしびこふる、略中 十一日、同五年正月あかつきに船をいだして、むろつをおふ、略中 このはねといふ所とふわらはのついでにて、又むかしの人